

# 大阪を生きる 12人の物語 第5回

ホスト 高島幸次

ゲスト 藤尾政弘



人々を通して見てくる大阪の文化的魅力を掘り起こす対談連載「大阪を生きる12人の物語」。第5回のゲストは、大阪を拠点に巨大フードチェーンを展開している株式会社フジオフードグループ本社・代表取締役社長の藤尾政弘さん。ホストはお馴染み、歴史学者の高島幸次さんです。

## 天満の街が育ててくれた

高島 藤尾社長がお生まれになった天神橋筋商店街は大阪ではよく知られた商店街ですが、大阪以外の読者のために補足しますと、大阪市北区の天満てんまと呼ばれる地域にある、日本一長い商店街なんです。天満の名の由来にもなっている大阪天満宮の天神祭は大阪の夏の風物詩で、日本三天祭りにも数えられています。浪華三大橋（天満橋・天神橋・難波橋）もあって、天満は水都・大阪の象徴的な街でもあるんですよ。

社長が代表をお務めの株式会社フジオフードグループ本社は天神橋の北詰にありますが、以前はすぐ近く

の南森町にありましたね。いずれにしても天満の中なわけですが、天満を離れない理由がおりなんでしょか。

藤尾 天神橋筋商店街で大衆食堂を営む家に生まれ育ったことは、もちろん大きいと思います。商店街には、幼少時代を過ごした昭和三十年代当時からいろいろな食べ物屋さんがあり、それ以外にも多種多様なお店があって、いわゆる商人が集う下町でした。そこで商売の楽しさや厳しさを教わったという意味で天満は私の原点で、原点を忘れないという思いから、いまでもこの街を離れずにいるんです。

高島 ご両親と同じように、将来は自分も食にまつわる仕事をしていくんだという意識は、子どもの頃からお持ちだったんですか？

藤尾 私が生まれた昭和三十年は終戦から十年しか経っておらず、まわりで働く人には、戦争で夫や子どもを亡くした、いわゆる「おばさん」といわれる世代の女性が多かったです。そうしたおばさんたちの多数は住み込みで働いておられたんですが、私はそういう人たちの涙をたくさん見て育ちました。



両親が営む食堂の前で父親に抱かれる幼い日の藤尾政弘さん（写真提供：株式会社フジオフードグループ本社）

厨房に立つ当時の料理人というのは職人気質で、自分の腕を誇りに思うのと同じように、一緒に働いている人たちのことも誇りに思って大事にできる人が少なかった。もちろんそんな人ばかりではなかったんですが、私が幼い頃の食堂というのは、どうしても職人優位になりがちでした。たとえば、ざるそばの注文が入ったときに、おばさんが「ざるそば一丁」とオーダーすると、職人が鍋をひっくり返し、「ざるそばは一枚で通せ！」と言い残して帰ってしまうんです。一度そうなってしまうと、おばさんがいくら泣いて謝っても聞き入れられない。店の片隅に両親の四畳半の部屋が